平成二十四年八月十日発行
皇學館論叢第四十五巻第四号　抜刷

佐藤春夫訳『平妖伝』の考察

―その成立と背景―

張　文　宏

皇學館論叢　第四十五巻第四号
平成二十四年八月十日

佐藤春夫訳『平妖伝』の考察

―その成立と背景―

張　文　宏

□ 要　旨

昭和初期、佐藤春夫による馮夢龍著『平妖伝』（四〇回増補本）の日本語訳は、文学史上、最初の完訳である。だが、中国文学に依拠する春夫の他の翻訳作品が注目を集めたのに対して、この春夫訳『平妖伝』の研究は等閑に付されたままである。本稿では、『平妖伝』諸本の日本への影響を確かめ、春夫訳『平妖伝』翻訳の経緯とその構成とについて検討する。そして春夫訳『平妖伝』の特色を析出しつつ、中国古典文学を対象とした彼の翻訳作品の意義と価値とを確認する。

□ キーワード

佐藤春夫　『平妖伝』　馮夢龍　翻訳　神魔小説

はじめに

佐藤春夫訳『平妖伝』は、昭和四（一九二九）年一二月、改造社発行の『世界大衆文学全集』第二五巻に収められた。後に補筆され、同七（一九三二）年一一月、改造文庫上・下二巻として刊行、更に同二六（一九五一）年には、世紀書房より上巻（二月）、下巻（五月）が出版される。また、平成五（一九九三）年五月には、『平妖伝』上・下二巻が、ちくま文庫（筑摩書房）に収録された。

ところで、日本語の完訳としては、佐藤春夫訳『平妖伝』が、日本文学史上最初となる。そして『平妖伝』に関しては、佐藤春夫の翻訳の態度は、翻案ではなく、直訳に近いのも特色である。これらを踏まえて、以下、次の課題について、研究を進める。

本稿では、まず典拠となった『平妖伝』諸本の日本への影響を調査する。次に、その翻訳の特色と意図とについて考察する。また、昭和四年に刊行された佐藤春夫『車塵集』（九月、武蔵野書院）との比較考察からも、当時の、谷崎潤一郎・千代夫人への恋慕の情が見え隠れする。これまでに論じられなかった彼の、中国古典の翻訳の特色とその意義とに新たな照射を試みたい。

一、『平妖伝』の日本への影響

『西遊記』と同様に神魔小説[1]と言われる『平妖伝（へいようでん）』は、二種類のテキストがある。それは元末明初、羅貫中[2]著の

二〇回本『三遂平妖伝』と、明の末期、それを大幅に増訂した馮夢龍[3]著の四〇回本『北宋三遂平妖伝』である。その作品は北宋の慶暦七年（一〇四七）に王則が貝州（現、河北省）で起した弥勒教徒の反乱[4]を題材にした長編小説である。書名に「三遂」を冠するのは、「遂」を名とする三人、即ち諸葛遂智・馬遂・李遂が王則の乱を平定するのに功績があったからである。

現存する『平妖伝』の諸本の中で、最も古いものは『三遂平妖伝』と題する四巻二〇回本である。この刻本は明の万暦二〇年代（一五九二～一六〇一）の成立と考えられ、馬廉旧蔵の北京大学図書館蔵本と小津桂窓旧蔵の天理図書館蔵本であることが知られている。四〇回本では内閣文庫に蔵する『天許斎批点北宋三遂平妖伝』（泰昌元年、即ち一六二〇年刊行）が最も古い。同書については孫楷第の『日本東京所見中国小説書目提要』に詳細に記載される[5]。天許斎本の版木が焼けた後、新しく墨憨斎本が崇禎七年（一六三四）以後に刊行された。両者は基本的には異なるところがない。

『平妖伝』がいつごろ日本に伝わってきたかについては考証しにくいが、この本は伝来の当時にはほとんど反響を呼ばなかったと言われている。一般的に日本では、中国の白話小説が広く読まれるようになったのは岡嶋冠山（一六七四～一七三八）以後であるから、『平妖伝』もその例にもれるものではなかろう。

江戸時代、怪談を好んだ林羅山（一五八三～一六五七）は、『平妖伝』の邦訳を試みて果たさなかった。清田儋叟（たんそう）（一七一九～一七八五）は『西遊記』『金瓶梅』などの中国の小説を渉猟し、最後に『平妖伝』を読んでとくに感心していた[6]。また、秋水園主人の『小説字彙』（一七九一年）の巻首の「援引書目」には『平妖伝』の名も見える。このような状況下で、邦訳『通俗平妖伝』一〇巻一〇回が世に問われることとなった。これは京都大学の文学部と図書館に所蔵され、国会図書館にも蔵されている。

実際に、『平妖伝』に大きな関心を示したのは滝沢馬琴（一七六七～一八四八）である。太田辰夫氏の『平妖伝』（『中国古典文学大系』三六巻）の「解説」によれば、「『通俗平妖伝』一〇冊のうちに五冊ばかり読んでいた馬琴」は、殿村篠斎（本名は佐藤五平。松阪の富商）が原本『北宋三遂平妖伝』を入手したとき、借覧を依頼する手紙を送っている。しかしこの本は貸してもらえないまま、篠斎は面白くないといって売却してしまった。馬琴はそれを知らずに再び借用を申し込んだところ、篠斎は記憶をたよりにその梗概を記し『平妖伝略解』として彼に送ってきたのである。後に「書業堂刊の四十回本も購入し通読したが、その本は二九回までしかない欠本であった」。なお「二〇回本のほうが天明四年正月九日に届けられた。馬琴はさっそく、熱心に読みはじめ、一三日に読み終えている。（略）ようやく四月になって『三遂平妖伝国字評』を完成」（前掲、太田氏「解説」）と紹介している。さらに太田氏は、馬琴が「四〇回の完本を見ずに、二〇回本を推賞したのは、いささか軽率のそしりをまぬかれないようである」[7]と批判している。

明治、大正期には、特に『平妖伝』に興味を寄せる文人は殆どいなかったようである。昭和に入り、四〇回本『平妖伝』の日本語版がようやく現れた。その訳者は中国文学の紹介の領域でも名高い、当時三七歳の佐藤春夫である。

二、春夫訳『平妖伝』の成立の経緯

臨川書店『定本佐藤春夫全集』第二九巻の村松友視氏の「解題」（四三八頁）によれば、佐藤春夫訳『平妖伝』は昭和四（一九二九）年一二月一三日『世界大衆文学全集』第二五巻として改造社から刊行。後に、同書における抄訳・未訳の部分を補完し、昭和七（一九三二）年一一月改造文庫『平妖伝』上下二巻として刊行され、さらに世紀書房から『平妖伝』上巻（昭和二六年二月）下巻（同年五月）として刊行された。なお、村松氏の「解題」に触れられていな

いが、平成五（一九九三）年五月に筑摩書房より『平妖伝』上下二巻（ちくま文庫）として出版されている。

ところで、『平妖伝』の訳文に手を染める動機については、『世界大衆文学全集』版「訳本平妖伝小引」において、春夫はこう表明している。

> 世界大衆文学全集中に支那のものを一冊選定するに当たつて、教を露伴幸田先生に乞うたところが、先生は言下に平妖伝を上げられた。さうしてこれの邦訳は既に先づ林羅山が試みて果さず滝沢馬琴も心を抱いたままで世を去つたのだから、今日これを完成することはこの意味でも快事であらうと、訳者を激励一番せられた。先生の厚志に対しては篤く感謝する。訳者はこれが訳筆を辿りながら、先生が特に興味饒なる支那小説としてこの作を挙げられた理由を具に感得した。(8)

右の記述によれば、幸田露伴からの推薦と激励は『平妖伝』訳出の主な理由となったという。また彼は、自筆の「『平妖伝』推薦文」（昭和二六年二月、世紀書房『平妖伝』上）の中で「水滸伝も西遊記も文句をつけた先生が、はたと手を拍って開口一番これに限ると推薦したのがこの平妖伝」だと記している。

一方、『新編図録　佐藤春夫』（新宮市立佐藤春夫記念館発行、平成二〇年・二〇〇八年三月）の春夫年譜によれば、昭和四年の翻訳・翻案作品を通覧すると、一月に『支那童話集』（アルス）、九月に『車塵集』（武蔵野書院）、一二月に『平妖伝』（改造社）など、その一連の大きな訳業が注目されている。従って、昭和四年は中国文学の翻訳に大きな情熱を注いだ春夫にとって収穫の一年間であったと言える。

翌年に千代子と結婚することになる佐藤春夫は、強烈なロマンチシズムが横溢した漢詩と中国の物語とを援用し、

彼女に恋情を伝えていたのであろうか。『車塵集』を通して当時まだ谷崎夫人だった千代子を思慕し、自らの感情を訴えたのであるという吉川発輝氏の説[9]がある。だが、漢詩だけでは十分に千代子への思慕を歌い出せないと考えた春夫は、改めて『支那童話集』と『平妖伝』のような面白さや怪異などの物語に思いを馳せ、自らの気持の幅を広げてみせたのではないかと思わせるのである。

ところで、『平妖伝』の訳業に取り組む際に、当時二つのテキストの流通の状況、依拠本文を採用する理由などについて、「訳本平妖伝小引」（前掲同）に記されている。

> 羅貫中の原本は二十回本で、開巻には胡員外が仙画に出会ふところからはじまつてゐるといふ。この原本は先年北京で発見されたさうだが、我が国では見当らないらしい。今普通に行はれてゐる龍子猶が補定の四十回本は、冒頭に十五回を費して各主要人物の来歴を明かにした外、処々に五回を挿入して四十回本に纏め上げたと言はれてゐる。この補定本はその序文によると明の泰昌元年（西歴一六二〇）に出来たものである。[10]

右の記述により、春夫は羅貫中の原本を見ていたわけでなく、馮夢龍の四〇回の補定本を依拠本文としたのである。だが、いかなる補定本に拠ったかは推測しにくい。一応、その四〇回本の粗筋は、大体以下のようにまとめられる。

春秋時代、白猿の化身である袁公は女神・九天玄女の弟子となり、玉帝によって秘書の管理人に任じられる。だが袁公は、三十六の天罡大変法と七十二の地煞小変法が記された『如意冊』という秘冊を盗み出し、その内容を下界の白雲洞の石壁に記してしまった。この件が玉帝に知れたため、秘冊の内容が漏れぬように、袁公はその石壁の番をすることになる。

しかし、宋の時代、蛋子和尚と呼ばれる卵から生まれた男はこの秘冊を盗んだ。蛋子は老狐の化身・聖姑姑と出会ってその内容を解読し、聖姑姑やその息子左黜と共に、秘冊の妖術を習得する。

聖姑姑の娘胡媚児は、かつて則天武后の恋人だった張六郎の生まれ変わりであった。胡媚児は旅中に突風にさらわれ母とばらばらになり、道士張鸞の世話になっていたが、太子を惑わそうとしたことで天上からの神将に斬られてしまう。後に胡媚児は胡員外の娘として胡永児と転生するが、聖姑姑によって前世は親子だったことを告げられ、妖術の会得に励むことになった。その後、聖姑姑一行は貝州へと移り、胡永児は前世の因縁で、則天武后の生まれ変わりである軍人・王則と結婚する。

その頃、貝州の知事が兵士たちに俸禄を支給しないという出来事が起こった。これに出くわした王則は、兵士たちに米と金を与えたが、このうち左黜が用意した米と卜吉（張鸞の弟子）が用意した金が貝州の倉庫から盗まれたものだったため、知事は怒り、王則を投獄する。だが王則は左黜たちによって救い出されて知事を殺した。王則の謀反は都に伝えられ、仁宗皇帝によって、文彦博（文招討とも呼ぶ）という八〇歳の老将が討伐の総帥に任命される。しかし、秘冊の力を得た妖人たちは妖術を駆使して討伐軍と戦い、貝州を騒がせることとなる。蛋子和尚は諸葛遂智に化け、兵士の馬遂と李遂と一緒に知恵を絞り文彦博に協力し、妖人たちの乱を平定した。

三、春夫訳『平妖伝』の構成

講談社版『佐藤春夫全集』（昭和四一年・一九六六年四月～昭和四五年・一九七〇年三月）には『平妖伝』は収録されていない。この翻訳作品は臨川書店版『定本佐藤春夫全集』第二九巻に初めて収録された。村松氏の「解題」（前出、

四三九頁）に、「『世界大衆文学全集』版の後半に抄訳・未訳の部分があるため、底本には改造文庫版本文を用いた」とある。

本稿では、『定本佐藤春夫全集』第二九巻所収の『平妖伝』本文（以下は春夫訳と略す）を基に、中国語版の四〇回排印本『平妖伝』（上海古籍出版社、一九八一年五月）[11]を参照しながら、まず春夫訳の構成を整理する。

春夫訳は原作と同じく四〇回（小見出しを訳出せずに回数のみを記している）に分け、忠実な翻訳を行ったのである。だが、各回の冒頭と末尾に付される詩も、文中に挟まれた詩と説明文も、春夫によってほとんどカットされてしまった。

全体的に言えば、春夫訳には「前半の密」と「後半の疎」が見出せる。それは枚数のみ数えても明瞭である。つまり前半（一回〜二〇回）は五頁から一八七頁まで妖人の来歴と妖術が紹介され、後半（二一回〜四〇回）は一八七頁から三三五頁まで反乱の事件が展開される。

改造文庫版「訳本平妖伝小引」で、訳者自身が述べたように、初出は「時日と枚数との束縛を受けて前半に密で後半に疎の憾みがあつた」。後に、「その改訂を充分になし得ないでゐる間に、増補の方だけはずん〳〵と出来上つて後半の疎は前半の密とその度をほぼ一にし得るに到つた。その増補は実に増田渉君の努力の賜である」[12]。増補後、改造文庫版では、確かに「後半の疎」は少し直されたのであるが、そのような「疎」の箇所はまだ見られる。

次は、春夫訳『平妖伝』によって省略された箇所である。それらの箇所を、太田辰夫訳『平妖伝』（『中国古典文学大系』三六巻、平凡社、一九六七年一一月）により、そのまま引用する。（但し⑥は太田訳が長文のため筆者が内容を要約した。また文末の頁数は『中国古典文学大系』三六巻による。）

①第三二回「夙(ふる)き姻縁にて永児　夫を招き／銭米を散じて王則　軍を買う」

この知事は姓を張、名を徳と申すのですが、郡の民はことごとく彼を罵って、こう申しております。（詩文略）

この知事は毎日、職務をせず、ひたすら金を貪っております。（三二二頁）

②第三三回「左瘸師(さかし)　神を顕わして衆を驚かし／王都排　夥(なかま)を糾(あつ)めて仇(あだ)を報ず」

かの紹興は銭清鎮に一銭太守廟というのがございますが、その太守と申しまするは、苗字を劉、名を寵というお方で、西漢は桓帝の御代に会稽の太守となられ、清きこと水の如く、いささかの汚れもございませぬ。（劉寵伝説略）

（三二三頁）

③同上

知事は驚いてまっ青になり、胸の中で思案いたします。（略）さんざん考えたあげく、いたし方なく一つの貼り札を出しました。その文に曰く、貝州の知事・張、逮捕のための事。排軍王則の自供に拠るに、同じく倉庫を盗める妖賊・張鸞らは未だ獲ず。もし真の賊を擒捕し来りて献ずる者あらば、犯人一人につき、官より賞金一千貫を給す。情を知りて届けいでざる者は、一体に罪にす。故に示す。（略）知事は書記に命じ、同じ文を十枚ほど認めさせ、それぞれの城門および役所の前、ならびに城の内外の目抜きの場所に貼り出させます。また一方では捕り手に命じ、期日を限り虱つぶしに捜査させました。（三二五頁）

④第三四回「劉彦威　三たび貝州城にて敗れ／胡永児　大いに河北の地を掠む」

（劉彦威は）軍中の画家に命じ、布に獅子の図三百枚を画かせ、十日以内に完成を命じます。そこで陶必顕に新軍を率いさせて先鋒とし、できあがった獅子の衣を三百匹の軍馬に着せました。これは、もしも賊軍が妖術を使って虎豹をよこした時には、獅子の衣を着せた軍馬を放ち、兵士たちは後ろからドラを鳴らして従うという手

はずであります。いったい獅子は百獣の王でありますから、ドラを鳴らしてその声にかたどれば、虎豹はそれを見て、必ず退くであろうという算段なのでございます。（三三七頁）

⑤同上

開封で肉屋をしていた張琪、炊餅売りの任遷、そば屋の呉三郎も、胡永児が王則の妻になったと聞き、みな貝州に来て王則に投じました。（三四〇頁）

⑥第三五回「趙無瑕　生を拚てて賊を紿き／包竜図　詔に応じて賢を推す」

胡永児は王俊という若者と通じ淫欲に耽る。夫の王則は怒って聖姑姑に訴えるが、かえってやりこめられ、民間の美色を漁る。関疑の妻趙無瑕の美貌を聞き、后妃になるようと強迫すると趙は自殺する。（以上、筆者要約）

右の①～⑥は、第三二回から第三五回にかけてであり、そこに省略の箇所が集中している。もちろん、前半にも省略はある。例えば、冷家庄の外観についての描写（第九回）、楊興が主人の楊巡検から受命した後、帰宅して女房と別れた場面（第一二回）などである。

要するに、春夫訳では、前半と比べると、後半の省略が多いのは明らかだが、全体的なバランスがよく整っている。即ちカットされた部分はおよそ些細なところなので、原作の主旨にもストーリーの展開にも殆ど影響がない。だから、当時の「時日と紙数との制限」で、春夫は原作の意図を十分に呑み込んでから取捨選択を通して適宜に削除を施したのであると言える。

ところが、太田辰夫氏は、滝沢馬琴の二〇回本の『平妖伝』に対する傾倒を批判した後、春夫訳にも不満を漏らしている。

その訳は、詩詞などわずらわしいものはすべて除き、話の筋だけとしている。終わりに近くはことに省略が多く、第三十五回などはその大半を省略している。その部分は胡永児と王俊のことおよび趙無瑕のことを述べたところで、馮夢龍の増補の部分である。佐藤氏は二十回本を見ていたわけではないが、結果的には二十回本に近くなっている。おそらく馮の増補がどぎつく、いやらしい感じがするし、また全体的な統一を破っていることを考慮しての文学的加工であろう。[13]

このように、太田氏は、春夫訳を「話の筋だけ」とか、「二十回本に近くなっている」と批評している。本稿では、以下の事実を辿りながら、太田氏の論議に賛同できない理由を述べてみる。

二〇回本は「胡員外喜逢仙画／張院君怒産妖胎」から始まる。しかし春夫訳は、その依拠本文となった四〇回本と同じく「授剣術処女下山／盗法書袁公帰洞」から始まる。主な人物の来歴及び冒頭の「灯花婆婆」の物語は二〇回本には全くない。にもかかわらず、これらは春夫訳の半分弱の紙面を占める。従って、所謂「二十回本に近くなっている」というのは妥当ではないと考える。

なお太田氏の「文学的加工」という論説も証拠が足りない。春夫は中国文学に取材した翻訳・翻案作品を数多く作り、そして典拠に拠りながらも多かれ少なかれ改変・加筆を施したのである。そのような作業は「文学的加工」と言われてもよい。しかし、『平妖伝』の訳出は例外である。『平妖伝』の訳文に省略の部分が随所にあるが、訳者による改変・加筆のところは見つからない。すなわち訳者は「文学的加工」をせず直訳を行ったのである。

その直訳の理由は『平妖伝』の内容と関係があると思わざるを得ない。この長編作品では、幻術で人を惑わす妖人

たちが跳梁跋扈する。荒唐無稽の神魔小説としては、春夫の接触していた中国の童話や才子佳人式の通俗小説とは全く異なった様相を示している。佐藤春夫は特有なロマンチシズム的気質で中国の通俗小説に共鳴しやすく、自分の思いを投影しながら自由自在に改作できる作家、詩人である。そして、神魔小説には中国道教の色彩が濃厚に反映されたという特色がある。彼はその特色に魅了され、さらにそれを表現するために、得意な「文学的加工」を捨てたのであろう。

四、春夫訳における特色

中国では、『平妖伝』は『西遊記』、『封神榜』と神魔小説の三部の傑作と呼ばれている。明の崇禎年間に初刻された短編白話小説集である『今古奇観』の笑花主人の序には「墨憨齋増補平妖、窮工極変、不失本末、其技在水滸三国之間」[14]と、『平妖伝』に対する好評がある。魯迅は『中国小説史略』において、そのような神魔小説が生まれた社会背景とその特徴について、次のように記している。

道教方術の士を持ち上げたのは宋の宣和の時代に頂点に達するが、元では仏教に帰趨したとはいえ、道教もはなはだ盛んであり、むろん世間では広くそれに幻惑された。明代の初めには少しく衰えたが、中頃になるとまたも極めて華々しくなった。（略）ところで歴来三教の争いはなにも解決がつかなかったのであるが、互いに影響しあって「同源」ということにした。いわゆる義利・正邪・善悪・是非・真偽といったことを、みな混ぜたうえで整理し、二元に分けてみると、専用の言葉はないが、神・魔と言えば、まずは概括できるだろう。小説の面では、

明の初めの『平妖伝』が口火を切り、それに続く作品は夥しいものがある。[15]

魯迅の指摘によれば、神魔小説では神が体制側、魔が反体制側である。神魔は超自然的存在の善と悪のことと言い換えてもよい。『平妖伝』をはじめ、ファンタスティックな妖術合戦の様相を呈している作品が多いが、ここに描かれる道教の実態は、案外に当時の中国の現実を反映している。かれらが信奉する道教は、老子の哲学ではなく、神仙道すなわち不老不死の実現をめざす信仰なのである。

佐藤春夫は以前から中国の古典作品に秘められた古代人の信仰問題を洞察してきており、まず『太平広記』から材を採った「徐福」「仙人になつた人」「維陽の十友」「廬山人」「仙術のいたづら」などの仙人の話を『支那童話集』（前出）にまとめた。それに続き、神仙、道士、仏教の諸菩薩まで組み入れた長編『平妖伝』を翻訳したのである。

前述のように、春夫訳の『平妖伝』には省略の部分がかなりあるが、依拠した四〇回本に見られる各種の道教の方術がそのまま残っている。それらは神魔小説の特色として春夫によって捕捉されてきたのである。次に、そのような箇所を抽出しつつ、中国古典の翻訳に見る春夫の捉え方を改めて確認したい。（頁数は『定本佐藤春夫全集』第二九巻のもの。以下同様）

（1）第一三回「東荘を閉じ楊春　金を点じ／法壇を築き聖姑　法を煉る」

老婆は口中に呪文を念じ、石上をめがけて一吐き唾をした。細い霧が落つるやうであつたが、急に手の掌で石を擦ると、凡そ掌の触れたところはみな紫金の色になつた。やがて千斤もある一塊の太湖石はきらきらとして金塊に変じた。（一二七頁）

（2）第一七回「博平県にて張鸞　雨を祈り／五竜壇にて左黜　法を闘わす」

県令「先生のおやりになるのは月孛の法ではありますまいか。」

張鸞「いや月孛の法ではなく、日黒（じつこく）の法です。太陽を黒くすれば、雨が降らぬ道理はありません。」（一五四頁）

（3）第二〇回「胡洪怒って如意冊を焼き／永児　夜　相国寺に赴く」

すぐに今解いたばかりの麻紐に、昼のうち老婆が拵へた完全な一文の銅銭を通し、下衣の帯を解いて紐に結び目をつくり、それを地上に置き、顔洗桶で蓋をした。水甕から一椀の水をくんで手に持ち、呪文を七遍唱へ、口に水を含んで下方へ向つて一吹きし、カツと言つた。水椀を置いてから顔洗桶をあげて見ると、青い椀のやうに一山の銅銭が出来てゐた。（一七九頁）

（4）同右

老婆「此処は大相国の寺中で仏塔の第一層だ。人はやつて来ないし、お前を教へるに恰好のところだ。先づお前に飛形法を教へてあげよう。それは窓からでも隙間からでも這入れるのだから出入に門を開ける必要がない。次に飛行法を教へてあげよう、木の腰掛に跨つて呪文を念じると腰掛は心のままに変化して空へ騰つて行く。お前はさうして、毎晩来たり行つたりすれば何といふ便利なことであらう。」（一八五頁）

（5）第二一回「平安街に員外　重ねて興り／胡永児　豆人紙馬を戦わす」

永児はその朱い葫蘆の栓を抜いた。それを傾けると二百粒ばかりの赤豆と、ずたずたに切つた稲草とが地上へ出た。口中に呪文を唱へ口に水を含んで一噴きし、声をはげまして言つた。「早く」と、三尺ばかりの人馬になり、みな紅い冑（よろひ）紅い甲、紅い袍（したぎ）に紅い紐、紅い旗指物（はたさしもの）に赤馬で地上を一かたまりになつて駈けめぐり一ケの陣勢を布いた。（略）永児はまた一つの白い葫蘆をとつて栓を抜き、それを傾けて二百粒ばかりの白豆と、ずたずたに切

つた稲草を地上へ出した。口中に呪文を唱へ水を含んで一噴きし、声をはげまして言つた。「早く」と、三尺ばかりの人馬に変じた。みな白い冑に白い甲、白い袍に白い紐、白い旗指物に白馬で、まるで銀牆鉄壁のやうにまた一個の陣勢を布いた。（略）永児は頭上から一本の金簪を抜き、声をはげまして言つた。「変れ！」手中の簪は一振の剣に変つた。それを両方の軍馬に指しながら声をはげまして言つた。「交戦！」両方の軍馬は迫りあつて喊声は天に達した。（一九一頁）

このように（1）～（5）では、それぞれ点金術、祈雨術、変銭法、飛行法、豆人紙馬の戦術を例として取りあげた。この類の道教の法術はそのまま春夫訳に全て現れている。他に、例えば、厭人之術（九回）、錬金術（一三回）、水遁之法（一七回）、変米法と替身法（二〇回）、賞双月（二六回）、水火葫蘆（二八回）、白馬迷軍之法（三八回）、五雷天心正法（三八回）、禁人法と隠身法（三九回）などがある。これらは中国で広く流布したが、実際は仙術か妖術かが分けにくい。中国では、『平妖伝』は道教の方術の百科全書の如く、中国人の思想に深く根をおろした道教をさぐるための、他に類を見ないものと見なされている。佐藤春夫は、道教が中国人の信仰に大きな影響を与えたことを理解したうえで、その要点を尽くして『平妖伝』を訳してきたとも言えよう。

なお、『平妖伝』に籠められた道士への諷刺と特有のユーモアが春夫訳には保留されている。例えば、第六回で、賈道士に言い寄られた胡媚児が思いついた奇妙な策略だった。媚児はまず、賈道士に「夜中に母が眠ってから妾はこっそり楼を下りて参りますから、あそこの寝台で貴方とお会いいたしましょう」と返事する。一方、もう一人、媚児に心を惹かれた乜（ニエ）道人にも、少し早めにあの寝台で会いましょう、と約束する。果してその夜、二人の道士がいそいそと寝台へやってくるが、互いに時間がずれている。後から来た賈道士は、寝台に人の気配があるのを知り、彼女

がもう来てくれていたと思って、先に寝台に来た乜道人を抱きしめる。「媚児の謀にうまうまとたぶらかされた両人の色男先生は、一つの寝台のうちで暗中模索の結果大いに驚き互に名告り合って、さてこうなっては仕方がないというので飛んだ笑い話を演出する」と、訳出された。

第一一回には、盲目に道教を信奉する楊巡検の愚かさを皮肉る一節がある。重病の奥さんのために、楊は狐精聖姑姑の法術を信じるから、彼女に普賢菩薩の御水を頼んだ。聖姑姑は「大胆にも寝室へはひつて茶碗にジャジャと尿をひつて、勿体さうに捧げて出て老婦に渡した」。老婦はそれを持って帰って楊に献じた。楊は全くの仙丹妙薬と信じ、女中に奥さんの頭を起させ、自ら碗の中の狐の尿を奥さんの口の内へ注いでやった。

五、誤訳、誤写について

山敷和男氏は「『平妖伝』を改造文庫でかつて読んだ記憶では随分かたくるしい用語が残っており、春夫がどの程度手を加えたかわからない。[16]」と述べている。だが原作の意図を守るために直訳を選んだ訳者は誰でも、原作の枠に束縛されやすく言葉の表現上に硬くなる傾向を免れないだろう。ここで、紙面の関係で、硬い表現の訳文は省略したが、その代りに誤訳と誤写の問題に少し触れてみたい。その誤訳と誤写の中から一部を次に挙げてみよう。（原文には◇を、訳文には◆を記し、傍線部は筆者が付した。）

◇亭上有個匾額、写「采蓮舫」三字、旁注探花馮拯題。（第九回）

◆亭には扁額が掛けられて採蓮舫の三字が書かれ傍に江探花馮極題とある。

中国の科挙制度で、殿試で首席及第者は「状元」、第二位は「榜眼」、第三位は「探花」と呼ばれる。訳者は「探花」の意味がわからなかったためか、また「注」を「江」と見違えて「江探花」とした。一般的に「極」という字は中国の人名には殆ど使わないが、「拯」という字は男性の人名に多く使用される。また『平妖伝』にも登場した宋の都開封府知事の包拯と言うと、それを知らない中国人は少ないだろう。だから「馮極」は「馮拯」の誤りと考える。従って、「亭には匾額が掛けられ、採蓮舫の三字が書いてあり、傍らに探花馮拯書と注してある」（筆者訳）と訳すべきである。

◇乗此機会、勧他起個無遮大会、保禳奶奶安康。那時僧道畢集、必有所聞矣。（第一一回）

◆この機会に乗じて、彼に勧めて無礼講をやらせ、奶奶の平癒を祈らせたなら、その時に必ず僧侶や道士が寄り集るから屹度何とか噂が聞かれると考えた。

「無遮」は仏語で、寛容で遮ることがないこと。「無遮大会」は貴賤・僧俗・上下・男女の区別がなく誰にでも財施・法施を行う法会を指す。「無礼講」は地位や身分の上下を取り払い楽しむという趣旨の宴会を指す。仏教との関わりがあるか否かには両者の差が存在するから、「無礼講」と訳されたのは誤っており、「無遮大会」と訳すべきである。さらに、「这個道場名為無遮大会、或是講経、明心見性」、「本宅因家眷不安、発心啓建無遮大会」という二箇所に「無遮大会」があり、この箇所は皆「無遮大会」と訳されており、正しい。

◇就是你朝暮問他、他那里也不知道、可不枉了。（第一二回）

◆それを貴方は明け暮れ私にお尋ねになるが、彼等が何処にいるかお知らせすることは私にはとても出来ないことです。

賈道士は媚児に魅され、彼女と別れた後、夢幻の中でも思いつづけ、毎日、弟子の瘸児（媚児の兄）に彼女の消息を聞く。ここで挙げられたのは瘸児の答えである。この辺りの春夫訳は原文の意を離れたし、また「枉」の訳出を省いている。「他那里也不知道」の「他」は、新文化運動（二〇世紀初期）まで男女を問わずに第三人称の代名詞として使われていた。ここでは媚児を指す。つまり媚児のほうは賈道士の片思いを知らないという意味になるので、「貴方は明け暮れ彼女のことを私にお尋ねになるんですが、彼女のほうは貴方の御気持を知らないんだから、むだじゃないですか」（筆者訳）と訳されるであろう。

また、人名、呼び方や官職名などが不統一なところがある。例えば、第五回の「乜道人」の初登場の二箇所、「この廟の香火の番をする斜眼道人」、「斜眼道人から一人の美しい百姓娘が井亭の内に坐っていると聞いては」では、原文の「乜道人」を「斜眼道人」とした。後に、春夫は「乜」がその道人の苗字であることに気づき、途中で「乜道人」と変更しただろう。

同じ第五回で、聖姑姑親子三人は華山へ参詣する途中、大雪に遭い、娘媚児に惹かれた関王廟の道士賈清風の誘いでその廟に宿泊する。聖姑姑は賈道士に「すなおに坐って和尚様のご親切を無にせぬようにするんだよ」と感謝し、後に「いっそ瘸児を和尚さんにあずけて弟子にしてもらった方がよい」と頼んだ。こんなふうに第六回までの原文の「法官」は全て「和尚」となおされた。前後の文脈に拠り、「法官」を「道士」と訳すれば正確であると思う。

翻訳を論ずる際に、誤写或は誤植の問題を軽んじてはいけない。『定本佐藤春夫全集』第二九巻「解題」に【本文

校訂上の注記】という題目の下で訂正がかなり多く入っている。これ以外に、中国語版の四〇回本『平妖伝』（前出）に照らし、さらに誤りが見つかった。それらは、以下の表にまとめられる。なお、表の上段の頁数等は『定本佐藤春夫全集』のものである。

頁・段・行	誤	正	原文
75上5	王枢密伯の公子	王枢密の公子	王枢密的公子
80上13	羅家畋	羅家畈	羅家畈
166上7	間雲の棲居	閑雲の棲居	閑雲来住
171上20	姓を糜、名を必達	姓を糜、名を必達	姓糜、名必達
179下20	青い椀のやうに	青い蛇のやうに	青蛇也似
191上22	銀牆鉄壁	銅牆鉄壁	銅牆鉄壁
216上13	皁角（くりの）の実を東京へ売りに	皂角（サイカチ）を東京へ売りに行く	販皂角去東京
288下12	叚雷	段雷	段雷
290上8	伝家瞳	傅家瞳	傅家瞳
296上23	狄青可を広南に専任し	狄青を広南に専任すべき	狄青可専任広南
304上5	二日の内に	三日の内に	三日之内

おわりに

春夫訳『平妖伝』は先に述べたように幸田露伴の意向を体して翻訳された。そして四〇回本の依拠本文の主旨を尊重し、その内容に忠実な翻訳を施したことがわかった。

だが、同じ昭和四年に出版された『車塵集』に比較すれば、当時の『平妖伝』に対する評価は低い。『車塵集』は詩人の想像力を駆使して韻律美しく歌いかえてはあるが、そのために原詩の詩想の一部は犠牲にされた。つまり『車塵集』は、訳者自身の千代子への思慕を託して綴られたものであり、厳密に言えば、半創作と言ってもよい。

しかし、『平妖伝』は春夫の本格的な翻訳作品であり、そこには春夫自身の創作が一切見られない。表現上、かたくるしいとか、省略が多すぎるとか、また訳文の中に誤訳、誤写などの箇所が散見されるが、春夫訳『平妖伝』の特色と価値とが貶められるとは考えられない。

江戸時代から昭和初期まで林羅山をはじめ『平妖伝』の邦訳を試みた人は少なくはないが、完訳を果たした人は一人もいなかった。そして昭和初期の春夫訳『平妖伝』は、日本文学史上、最初の完訳である。

春夫の他の翻訳・翻案作、例えば『聊斎志異』のような中国の通俗小説に取材する場合、中国の伝統的なものを、それに近い日本のものに改変するといった態度が貫かれていた。だが『平妖伝』にはこの春夫らしい翻訳の態度は消失してしまっている。「時日と枚数との束縛」で、原作の主旨を厳守することを前提に、一部分のストーリーと詩文と説明文をカットしなければならぬと春夫が考えていたことが想像できよう。そのような省略以外に、具体的に人物の服装、台詞から、各地の風景、習慣、諺、さらに道教関連の仙術、妖術までも原作のままに直訳を行った。

言い換えれば、中国の道教からの影響が色濃いこの神魔小説の特色を表現するために、春夫は得意な「文学的加工」を捨てることを惜しまずに直訳を選んだのではなかったか。日中文化の差異、特に言語上（表現、表記）の差異によって、誤訳、誤植などは避けられなかったのであろう。春夫訳『平妖伝』を通して、私たちは古代中国人の信仰や道教方術などをおよそ了解できるのである。したがって、同書は佐藤春夫における中国文学の翻訳の分野では、新しい価値と意義とを付与したと言える。こうして、千代夫人への愛は、『車塵集』に次いで、日本の翻訳文学に新たな地平を開拓することになったのである。

注

（1）魯迅『中国小説史略』（今村与志雄訳・ちくま文庫・全二巻もしくは中島長文訳・平凡社東洋文庫・全二巻）によれば、『平妖伝』は『西遊記』と同じく神魔小説というジャンルに属する。神魔小説とは要するに妖怪退治の物語ということである。

（2）羅貫中は、ほぼ元末明初の人、生没年未詳。羅は『忠義水滸伝』『三国志通俗演義』『隋唐両朝志伝』『残唐五代史演義』等の通俗白話小説の編者とされる。

（3）馮夢龍（一五七四～一六四六）は、字を猶龍、また子猶と言い、龍子猶と署名することもある。馮は注釈書も含め、小説と雑著を書くが、その多くは増補や編訂であり、自身による創作は少ない。泰昌元年、彼は四七歳の時には『平妖伝』の増補本を出版し、その後引き続いて名作「三言」即ち『喩世明言』『警世通言』『醒世恒言』を編纂した。

（4）王則の反乱は『続資治通鑑長編』巻一六一・一六二、『宋朝事実』一六、『東都事略』六三「明鎬伝」、六七「文彦博伝」、『宋史』二九二「明鎬伝」その他に見える。史実での王則の反乱は弥勒教を基盤にしたものであったが、神や妖怪が関わっていたという記述はない。

(5) 馮夢龍作・太田辰夫訳『中国古典文学大系』三六巻『平妖伝』（平凡社、一九六七年一一月）四〇一～四〇二頁。太田辰夫氏の翻訳原典は内閣文庫蔵『天許斎批点北宋三遂平妖伝』である。

(6) 注（5）と同じ。四一六頁。

(7) 注（5）と同じ。四一七頁。

(8) 『定本佐藤春夫全集』第三四巻（臨川書店、二〇〇一年二月）一四七～一四八頁。

(9) 吉川発輝『佐藤春夫『車塵集』―中国歴朝名媛詩の比較研究』（新典社、平成元年一月）一四頁。

(10) 注（8）と同じ。一四七頁。

(11) 中国では、馮夢龍四〇回本については、次の二種の排印本が刊行されている。

(a) 羅貫中・馮夢龍著『平妖伝』、豫章書社出版、一九八一年一月第一版江西第一印刷、平装一冊三五八頁。

(b) 羅貫中・馮夢龍著『平妖伝』、上海古籍出版社、一九八一年五月新一版、平装一冊二五五頁。本書は馮夢龍の増補本に最も近い清の道光一〇年の刊本に拠る排印本であり、一九五六年上海古典文学出版社版の旧紙型を用いた重印本である。

(12) 注（8）と同じ。一四九頁。

(13) 注（5）と同じ。四一九頁。

(14) 原文は『今古奇観』（岳麓書社［中国湖南省長沙市］、一九九二年一一月）を使用した。

(15) 魯迅著・中島長文訳『中国小説史略』2（平凡社、一九九七年七月）九頁。

(16) 山敷和男「佐藤春夫訳「百花村物語」について」（『中国古典研究』第四六号、二〇〇一年一二月）九六頁。

※本稿は、平成二四年度三重大学日本語学文学大会（六月三〇日、於三重大学）での講演を基にまとめたものである。なお、本研究は平成二三年度～二四年度の津田学術振興基金による成果の一部である。御支援いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

（ちょう　ぶんこう・皇學館大学大学院博士後期課程・河南師範大学准教授）